

# 植民地期朝鮮における私設学術講習所と不就学者の学び

——「養正院」及び「明月塾」出身者のオーラル・ヒストリーをもとに——

生涯学習基盤経営コース 李 正 連

Private Literacy Schools and Learning of Non-Enrollments in Colonial Korea  
—Based on the Oral History by Graduates of ‘Yangjeongwon’ and ‘Myoengwolsuk’—

Jeongyun LEE

The aim of this paper is to clarify the actual situation of learning of non-enrollments, and the features and circumstances of the educational activities of the Korean peoples, through the oral histories of private literacy school graduates in colonial Korea.

Private literacy schools have been considered as a “place of ethnic education” of the Korean peoples mainly. In this paper, through be considered based on the position of the students of the literacy schools, to re-analyze the educational activities of the Korean peoples in the colonial period.

## 目 次

1. はじめに
2. 不就学児童問題と私設学術講習所の増加
  - A. 就学率の低迷と不就学児童問題
  - B. 教育欲求の高まりと私設学術講習所の増加
3. 私設学術講習所における不就学者の学びの実態  
—養正院及び明月塾出身者のオーラル・ヒストリーをもとに—
  - A. インタビュー対象及び方法
    - ① インタビュー対象者
    - ② インタビュー内容及び方法
  - B. 養正院及び明月塾の設立と運営
    - ① 養正院の設立と運営
    - ② 明月塾の設立と運営
  - C. 養正院及び明月塾出身者のオーラル・ヒストリーにみる不就学者の学び
4. おわりに

## 1. はじめに

植民地期朝鮮における初等教育機関への就学率は、1930年代半ばにも30%を超えないほど、当時の多くの児童は学校教育を受けることができず、その代わりに学校以外の私設教育施設で日本語や朝鮮語、算数などのような基礎教育を受けていた。すなわち、経済的困難や近代学校教育に対する無理解、そして学校増設に

消極的だった朝鮮総督府の教育方針等の理由により、多くの子どもたちが学校に行けなかったのである。しかし、朝鮮には伝統的教育施設である書堂や通称「夜学」と呼ばれる私設学術講習所等の不就学児童のための教育施設が多く存在していた。この中でも、不就学者の学びにおける私設学術講習所（夜学）の役割は非常に大きく、その数も年々増加していった。

このような私設学術講習所に関する従来の研究は、当時の新聞や雑誌等の文献資料のみを用いた研究が大半であり、その実態解明においてはある程度限界を有していた。例えば、これまでの研究では、私設学術講習所は主として日本による「抑圧」に「抵抗」するための朝鮮民衆による「民族教育の場」としてとらえられてきたのである。しかし、当時の講習所の中には民族教育を行っていたところも確かに存在していたものの、そこで教えられていた教育内容をみると、「国語（＝日本語）」や算数等だけを教えていたところが多く、必ずしも民族教育が行われたと断定できないところも多数存在する。また、たとえ講習所の設立者や教師等が民族教育を目的としていたとしても、その教育を受けていた子どもたちが実際にどう受け止めていたか、またはどのような目的で講習所に通うようになったかなど、学習者の立場に注目した研究は管見の限り皆無である。

そこで、本研究では、植民地期の私設学術講習所出身者へのインタビュー調査、つまりオーラル・ヒスト

リーを通して、従来の文献資料中心の研究手法では明らかにできなかった植民地期朝鮮における不就学者の学びの実態、そして朝鮮民衆による自主的な教育活動の実状とその特徴を明らかにすることを目的とする。具体的には、私設講習所の設置に至るまでの経緯や設立者及び教師等をはじめ、教育内容及び方法、教材、そして講習所に対する子どもたちの思いや期待、満足度、その効果（進学、就職、民族意識の昂揚など）、その他のエピソードなどを聞き出すことによって、当時の私設学術講習所の実態をよりリアルに描き出し、朝鮮民衆による教育活動に関する新たな知見を提示したい。

なお、「私設学術講習所」と「夜学」の違いについてはその概念や範囲がまだ明確に定義されていないが、慮栄澤は私設学術講習会を夜間に実施する場合を夜学と称しており、李明實は私設学術講習会を行政的用語として、夜学は通念的用語として使っている<sup>1)</sup>。筆者もかつて「私設学術講習会」は朝鮮総督府の称した名称であり、この私設講習会は昼間または夜間に開かれるが、多くの講習会が夜間に行われていたため、一般的には「夜学」という表現が広く使われていたと述べたことがある<sup>2)</sup>。しかし、同じところを夜学会と講習所両方の名称を使う場合もある。例えば、筆者がインタビューしたことのある忠清南道論山郡連山面白石里の「白石労働夜学会」はその出身者たちによって「夜学会」と呼ばれ、記録もされているが、当時の新聞では同夜学会を「講習所」と報じている<sup>3)</sup>。当時の新聞等によれば、昼夜の区分はあるものの、私設学術講習所、私設講習所、夜学講習所、夜学等の用語が概ね同様の意味で使われており、「講習所」と称されている場合は主に学生数の規模や場所、教授体制がある程度組織化されていることが多いようにみられる。

一方、「夜学」と称されるものには一個人が自宅等で少人数を対象に簡単な識字教育を行うものも含まれる。例えば、講習所の場合は「○○(地名)講習所」「○○私設(学術)講習所」「○○(学)院」「○○(義)塾」「○○労働(夜学)講習所」「○○女子(夜学)講習所」などのように主に地名等の入った名称を付け、村全体に広報して生徒を募集する場合が多いが、夜学の中にはとくに名称も付けず、村の青年や少年等が主に農閑期や放課後を利用して近い親族や近所の人々に対して夜間に小規模で行う場合も少なくなかったのである。小規模にプライベートで行われる夜学とは違って、比較的組織的で規模の大きかった私設講習所の場合は、講習所で学んだ出身者が多いこともあり、当時のこと

を証言できる人が多く、また彼らによって講習所の設立者や教師の功績を讃える記念碑や記録集が作られるなど、当時の関連資料が残っているところもある。

そこで本研究では、村全体の不就学児童を対象にしていたため、規模が大きくなって学年制を導入しており、また運動会や演劇、遠足等の行事も行い、昼間に実施するなど、比較的学校と類似した体制で運営されていた私設学術講習所—養正院と明月塾—に注目し、講習所出身者へのインタビュー調査を通して当時の私設講習所の実態とその特質を明らかにしたい。

## 2. 不就学児童問題と私設学術講習所の増加

### A. 就学率の低迷と不就学児童問題

三・一独立運動以後、朝鮮民衆の学校教育に対する認識や態度は一変し、学校への就学希望率が急速に高まって就学競争が起こり、さらには朝鮮民衆による学校設立要求運動まで生じ始めた<sup>4)</sup>。このような動きは普通学校にとどまらず、中等学校レベルでも見られるなど、高い教育熱をみせていたのである<sup>5)</sup>。

それと同時に、朝鮮総督府の教育方針も「武断政治」から「文化政治」へ転換され、朝鮮総督府は直ちに教育制度の修正に取り掛かった。しかし、1919年の三・一独立運動後、朝鮮民衆の公立普通学校への就学希望者数は急増していくが、朝鮮総督府は学校増設に積極的に取り組むことなく、しかも、私立学校を三・一運動の主導勢力とみなし、私立学校に対する統制をより厳しくしていった。その結果、入学難はますます深刻化した。植民地朝鮮において1929年から始まった1面1校計画が完成した1936年においてさえ、学齢児童の就学率が私立学校も含めて25%（男子40%、女子10%）にすぎなかった<sup>6)</sup>。それゆえ、植民地朝鮮では学齢期であるにも関わらず、就学できない不就学児童が大量に発生していたのである。

1930年に実施された国勢調査では、朝鮮在住の日本人53万人、朝鮮人2,044万人に対して「読み書きの程度」に関する調査が行われた<sup>7)</sup>。同調査によれば、「植民者たる日本人の8割が少なくともカナを読み書きしていたのに対して、朝鮮人の8割弱は逆に識字技能を習得していなかった。ただ、これには0～5歳人口が含まれていないので、6歳以上人口のみに限定すれば識字率は、日本人が95.2%、朝鮮人が27.4%と、いずれも数値が高くなるとともに、より大きな格差を示している」<sup>8)</sup>。なお、都市部が農村部より識字率が高く、男性より女性の識字率のはるかに低かったことも明ら

かになっている<sup>9)</sup>。

また、1944年に行われた人口調査には学歴を問う欄が設定されていたが、その結果をみれば、1940年代に入っても朝鮮人の不就学率は依然として高い。表1にみられるように、12～45歳人口の不就学率は75.6%（男性60.0%、女性90.3%）であり、年齢層が高いほど、不就学率も高くなっている。女性の場合は、学歴を有する比率の最も高かった12～19歳人口においても、国民学校初等科卒業以上の学歴を有する者の割合は13.0%、簡易学校や書堂を修了した者も3.2%に止まっており、同年齢層の不就学率は82.3%である。それ以外の年齢層では9割以上が不就学状態であった点からも、女性の不就学問題は甚だしいものであった。

このように不就学児童を量産させた要因としては、学校増設における朝鮮総督府の消極的な教育方針が最も大きな要因ではあるが、一方、経済的な困難や男尊女卑思想などのような朝鮮民衆自身の抱えていた問題もその要因の一つとして挙げることができる。すなわち、当時は貧困に喘ぎ、学校に子どもを行かせる経済

的余裕のない家庭や、あるいは女性はいずれ嫁いでいく存在として家事・子育ての役割のみが強調され、学校に通わせる必要はないと思う親が多かった。しかし、それでもなお学校教育を憧れ、男性と同じく教育を受けたいと思う女性は数多く存在しており、全国各地から学校増設要求及び設立運動が起こり、女性教育の必要性を主張する声も少なくなかった。このように植民地朝鮮には学校不足に加え、経済的理由や女性という理由によって学校に通えない人が非常に多かった<sup>10)</sup>。このような多くの不就学者を救済するために、全国各地では地域有志による私設学術講習所（夜学）が次々と設立されるようになったのである。

## B. 教育欲求の高まりと私設学術講習所の増加

夜学は、大韓帝国末期に開明派知識人たちが国権擁護を目的として民族教育や殖産興業を図るために設立した民衆啓蒙のための場であり、それは植民地期に入ってから継承された。すなわち、まだ学校教育が広く普及されていなかった大韓帝国末期における夜学

表1 1944年朝鮮人口調査にみる学歴状況

		総数	①							②	③	①の%	②の%	③の%
			大学卒業	専門学校卒業	中等学校卒業	国民学校高等科卒業	国民学校初等科卒業	国民学校初等科退学	簡易学校・書堂修了	不就学				
～11歳	総数	7,368,032					3,675	6,191	20,501	7,337,665	0.0%	0.3%	99.6%	
	男	3,497,200					2,394	4,040	13,721	3,477,045	0.1%	0.4%	99.4%	
	女	3,870,832					1,281	2,151	6,780	3,860,620	0.0%	0.2%	99.7%	
12歳～45歳	総数	11,334,700	6,567	19,788	188,197	48,367	1,598,840	240,309	663,192	8,569,440	16.4%	5.9%	75.6%	
	男	5,507,077	6,473	16,344	151,428	39,327	1,247,479	179,233	560,931	3,305,862	26.5%	10.2%	60.0%	
	女	5,827,623	94	3,444	36,769	9,040	351,361	61,076	102,261	5,263,578	6.9%	1.8%	90.3%	
内訳	12歳～19歳	総数	3,507,069	10	583	38,223	18,209	830,379	89,234	178,353	2,352,078	25.3%	5.1%	67.1%
		男	1,673,191	9	136	26,824	13,615	608,989	60,182	119,735	843,701	38.8%	7.2%	50.4%
		女	1,833,878	1	447	11,399	4,594	221,390	29,052	58,618	1,508,377	13.0%	3.2%	82.3%
	20歳～29歳	総数	3,539,612	2,855	10,310	89,501	18,720	495,762	91,159	192,638	2,638,667	17.4%	5.4%	74.5%
		男	1,701,198	2,813	8,239	71,908	15,626	397,840	68,726	164,902	971,144	29.2%	9.7%	57.1%
		女	1,838,414	42	2,071	17,593	3,094	97,922	22,433	27,736	1,667,523	6.6%	1.5%	90.7%
	30歳～45歳	総数	4,288,019	3,702	8,895	60,473	11,438	272,699	59,916	292,201	3,578,695	8.3%	6.8%	83.5%
		男	2,132,688	3,651	7,969	52,696	10,086	240,650	50,325	276,294	1,491,017	14.8%	13.0%	69.9%
		女	2,155,331	51	926	7,777	1,352	32,049	9,591	15,907	2,087,678	2.0%	0.7%	96.9%
46歳～	総数	4,090,929	807	2,276	11,440	1,575	34,527	8,305	296,429	3,735,570	1.2%	7.2%	91.3%	
	男	1,991,251	799	2,211	10,683	1,375	31,617	6,977	289,656	1,647,933	2.3%	14.5%	82.8%	
	女	2,099,678	8	65	757	200	2,910	1,328	6,773	2,087,637	0.2%	0.3%	99.4%	

出典：板垣竜太「植民地期朝鮮における識字調査」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『アジア・アフリカ言語文化研究』58, 1999, p.292（初出：朝鮮総督府『（極秘）昭和十九年五月一日 人口調査結果報告 其ノ二』1945, pp.142-143）。

が学校教育を補完しつつ、その学校教育の経験を普及する役割も果たしたように、植民地期朝鮮における夜学も同様であった<sup>11)</sup>。ところが、「武断政治」を基にする植民地初期の朝鮮総督府は、朝鮮民衆が学校教育を避け、書堂や夜学等で教育を受けることを防ぎ、学校への就学率を引き上げるため、授業料免除や教材配布を行うほど、公立学校への就学を督励するほか、1913年には「私設学術講習会ニ関スル件」<sup>12)</sup>を制定し、夜学を統制していったのである。しかし、1919年の三・一運動以後、民衆の教育欲求は急速に高まり、急増する就学希望者に比べて教育機関数が法外に足りなかった状況の中で夜学、いわゆる「私設学術講習所」はよりいっそう増えていった。

一方、1920年前後において朝鮮民衆の教育熱を受け入れるべき教育機関としては書堂が最も一般的であったが<sup>13)</sup>、1918年の「書堂規則」公布以来、総督府の書堂政策が温存策から統制策へ変化したために、書堂数は1920年をピークにして減少していった。さらに、書堂に対する弾圧は、1929年6月に「書堂規則」を改正してからにより強化された。すなわち、1918年2月21日に公布された「書堂規則」では、書堂を設立する際には、「府尹、郡守又ハ島司二届出」を提出する届出制であったが、1929年6月に書堂規則を改正して「道知事認可制」にするなど、その設置に対する審査を以前より厳しくしたのである。その理由は、1913年に制定された「私設学術講習会ニ関スル件」において講習会、または夜学の設立時には「道長官の認可」が必要であったため、当時まだ届出制であった書堂規則を利用して改良書堂を設け、漢文だけではなく、一般講習会や夜学で教える科目を教えていたからである<sup>14)</sup>。さらに、李明實によれば、総督府は書堂への対策として「既存の書堂の立場を弱化し、優良な書堂に対する換骨奪胎的転換を求め、書堂の教育的機能を吸収し、その官製化を通じた就学率の増加を図る」ために、1934年から書堂の簡易な教育機関化を進め、普通学校に附設する形として簡易学校の設置を始めたという<sup>15)</sup>。このような施策は、1934年に政務総監が各道知事に対して発した「簡易初等教育機関設置ニ関スル件」という通牒の次の文章から窺うことができる。

朝鮮ニ於ケル初等普通教育普及ノ現状ト農村民度ノ実情ト鑑ミ簡易ナル初等教育機関ノ施設ニ依リ一般初等普通教育ノ普及ヲ補スハ最も緊要ナル事項ニシテ之カ実施ノ方法トシテハ在来ノ書堂ニ革新ヲ加ヘ既設ノ公立普通学校ニ附属セシムルヲ以テ最も

捷徑ト認メ別記要項ノ通昭和九年度ニ於ケル実行方案ヲ決定セラレタルニ付至急本按実施上必要ナル具體的ナ計画ヲ樹立セラレ<sup>16)</sup>

簡易学校は、「国民タルノ性格ヲ涵養シ国語ヲ習得セシムルコトニカムルト共ニ地方ノ実情ニ最も適切ナル職業陶冶ニ重点ヲ置クコト」を目的とし、公立普通学校の附設として設置されたものである。修業年限は2年、入学年齢は10歳を標準とし、児童の収容定員はおおよそ80人（1学年40人ずつ）、教員は1校1人としていた。教科目は修身（適宜唱歌及び体操を課す）、国語（日本語）、朝鮮語、算術の普通教科と、職業科（農業）であった<sup>17)</sup>。簡易学校は初年度全国の郡島に2校ずつ設立する計画を立ててから、毎年その数を増やして1942年には1,680校にまで増えるようになった。しかし、授業料が普通学校よりは安かったものの、生徒の大半が小作農の子弟であり、経済的負担から学校を中退する子どもが多かった<sup>18)</sup>。このように経済的理由や女性という理由等で学校を中退したり、就学できなかったりした子どもたちは、無償で教える私設講習所や夜学などに通っていた。

以上のように、三・一独立運動後朝鮮民衆は私設講習所や書堂を通して自らの教育欲求を満たしていたのに対し、朝鮮総督府はその書堂を簡易学校へ転換する形で当時の不就学児童問題を緩和させようとしたが、簡易学校へさえ行けない子どもは依然として多く、不就学児童の教育は主に朝鮮民衆が有志で設立した私設学術講習所や夜学等が担っていたのである。

### 3. 私設学術講習所における不就学者の学びの実態 —養正院及び明月塾出身者のオーラル・ヒストリーをもとに—

前節で検討したように、植民地期朝鮮には不就学児童や就学年齢を過ぎてしまった人々の教育のために、私設学術講習所が数多く存在していた。しかし、これらの私設講習所についてその設立主体や教師、教科目、財政状況等のごく簡単な情報は当時の新聞や雑誌等から得られるものの、正規の学校とは違って統計や学籍簿などの記録も残っておらず、それ以上の部分については情報収集が困難である。それ故、これまでの先行研究もその大半が当時の新聞や雑誌等の文献資料のみに頼る場合が多く、当時の講習所でのどのような教育がどのような方法で行われ、また子どもたちはどのようなきっかけまたは目的で通うようになり、何を学

び、感じたのか、さらには家族等の周囲の人々の反応はどうだったのかなど、より詳細な実態については明らかにしていない。

そこで、本研究では植民地期の私設学術講習所、その中でも出身者が多く生存しており、また当時の実状について証言を得ることができた養正院と明月塾を中心に当時の私設学術講習所について考察したい。

## A. インタビュー対象及び方法

### ① インタビュー対象

養正院出身者4名へのインタビューは、2013年10月10日に全羅南道光州市と長興郡の両地域で行った。出身者のうち、3名は今故郷の長興郡を離れ、光州市に在住しており、一人は今も長興郡に住んでいる。4名の年齢はそれぞれ1932年生まれの82歳、1931年生まれの83歳、1929年生まれの85歳、1927年生まれの87歳（2013年調査時点、数え年）である。一方、明月塾出身者6名へのインタビューは、2013年6月20～21日と同年8月14日にそれぞれ済州島とソウル市で行った。年齢は、1929年生まれの85歳から1935年生まれの79歳（2013年調査時点、数え年）まで計6名である。両講習所への修学時期は1940年代で対象者の当時の年齢は8～15歳であり、概ね約2～3年間通っていた。

なお、本研究ではインタビューから許可を得て、実名や生年等の個人情報を使うとともに、植民地期の創氏改名による日本名も明記している。また、インタビューの年齢は韓国で通用されている数え年を使う。インタビューについての基本情報は表2の通りである。

### ② インタビュー内容及び方法

主なインタビュー内容は次の通りである。

- 氏名（創氏改名の有無）、年齢（生年）、性別、故郷及び成長場所、家族関係、家計状況（親の職業）
- 当時の社会的状況や経済状況
- 学校に通った経験の有無（理由）
- 夜学に通うようになった動機（目的）及び修学時期（年齢）と期間
- 夜学で学び、経験した内容（教科内容及び運動会、遠足、演劇などの行事）
- 教授方法（使用言語）
- 教科書や教材
- 教師（朝鮮人なのかどうか、人数、年齢、性別、職業など）
- 夜学の場所
- 夜学の生徒（人数、年齢、性別、家計状況など）
- 授業料の有無
- 満足度（最も良かった点など）
- 学校に通う子どもたちとの関係や印象
- 当時持っていた将来の夢
- 夜学卒業後の進路（学校進学や就職など）
- 日本人との関係や印象、日本人友達の有無など
- （本人及び周りの大人たちの）独立に対する認識や雰囲気など

インタビューは、上記の項目をもとにして半構造化インタビューを行った。インタビュー時には、事前にインタビューの許可を得たうえで、ビデオカメラ及びICレコーダーで撮影と録音をしながら実施した。

表2 インタビューの基本情報

講習所	氏名（日本名）	生年（年齢）*	性別	修学時期	修学期間
養正院	オ・ヨンスク	1932年（82歳）	女性	9歳～12歳（1940～1943年）	4年程度
	金純任（金光純任）	1929年（85歳）	女性	12～15歳（1940～1942年）	3年
	尹金同（伊原金同）	1927年（87歳）	男性	13～14歳（1939～1941年）	2年
	任泰善（石川泰善）	1931年（83歳）	男性	10～12歳（1940～1942年）	3年
明月塾	呉ジョンスク（豊山よし子）	1929年（85歳）	女性	14～15歳（1942～43年）	2年
	呉ゲア（豊山明子）	1931年（83歳）	女性	12～13歳（1942～43年）	1年半程度
	呉相春（豊山花子）	1931年（83歳）	女性	12～13歳（1942～43年）	2年 （ただし、間欠的に通う）
	呉鏞守（豊山英樹）	1934年（80歳）	男性	9～10歳（1942～43年）	2年
	梁栄一（吉川栄一）	1933年（81歳）	男性	10～11歳（1942～43年）	2年
	文淳昱（文村淳昱）	1935年（79歳）	男性	8～9歳（1942～43年）	2年

注）年齢はインタビュー調査を行った2013年現在の数え年であり、修学時期の年齢も数え年である。

所要時間は、一人当たり短い場合は30分程度、長い場合は2時間程度かかったものもあるが、大半が約1時間程度だった。

なお、今回のインタビューの中には、自叙伝やエッセイなどを出版した人もおり、その著書には植民地期に通った講習所についても詳細に記述されているので、それらの著書も参考にする。また養正院については、その設立者の尹允基についての著書や論文が発表されており、それも参照したい。

## B. 養正院及び明月塾の設立と運営

### ① 養正院の設立と運営

養正院は、元訓導の尹允基が1940年4月12日に全羅南道宝城郡会泉面鳳崗里に設立した私設講習所である<sup>19)</sup>。「文盲退治・貧困打破・浮浪児収容・皇国臣民化」という旗幟を掲げていたが、「皇国臣民化」は当時官からの監視が厳しかったので、入れざるを得なかったといわれている<sup>20)</sup>。

尹氏は、1900年に全羅南道宝城郡蘆東面で生まれ、1925年3月全南公立師範学校卒業後、1925年3月31日から1934年4月27日まで全南長興郡安良面にある安良公立普通学校の訓導として在職し、その直後同道宝城郡泉浦面（1941年に会泉面へ改編）に設立された泉浦簡易学校への発令を受ける<sup>21)</sup>。しかし、発令当時、泉浦簡易学校はまだ存在せず、尹氏は1933年から安良公立普通学校と泉浦を行き来しながら、泉浦簡易学校の新設に取り組んだのである<sup>22)</sup>。その後、1939年3月31日、泉浦簡易学校から宝城普通学校へ転補されるが、同年5月泉浦簡易学校の父兄や地域有志たちが尹氏の功績を讃える記念碑を建立するほど、彼の役割は子どもだけではなく、地域住民にも大きな影響を与えた人物であったのである。また、尹氏は独立運動家を陰で経済的に支えたともいわれており、表では公立学校の訓導として勤めながらも、裏では独立運動化を支援しつつ、学校や私設講習所でも密かに子どもたちに朝鮮の歴史やハングルを教える等民族教育を行う人物であったと伝えられている<sup>23)</sup>。

尹氏は、宝城普通学校に異動してから間もなく辞職し、養正院の設立に専念するようになるが、1939年9月、鳳崗里の野原に養正院の甲板だけを掲げ、校舎を子どもたちや地域住民と一緒に建てたといわれる。今回のインタビューの一人である金純任はこの時から養正院に通いはじめ、校舎づくりにも参加していたと証言している。

養正院では当時の初等教育機関で教えていた教科

をほとんど教えていたといわれている。例えば、国語（日本語）と作文、算術、漢字と書道、音楽、美術、体育などが教えられていたことが出身者の証言から窺える。授業は毎日行われており、授業時間は、1－2年生課程は午前9時～午後1時、3－4年生課程は午前9時～午後2時、5－6年生課程はいわゆる中学進学準備クラスとして午後2時から運営されていた。当時中学進学競争が激しかったので、受験に失敗した生徒たちを集めて中学進学クラスも設けていたのである。今回のインタビューの尹金同は、中学受験に失敗し、2年間中学進学準備クラスに通ったという。さらに、上級クラスとして師範学校や判任官試験を準備する人も別途に集めて指導していたのである<sup>24)</sup>。

養正院は設立当初養正院が位置している鳳崗里を中心とした会泉面から約300名の生徒が通うことと想定されていたが、実際は第1期生募集に500名以上の人が来たのである。10キロ以上離れている隣町から通う人も多かったが、かなりの遠方から来る生徒たちは宿泊ができるように食事や寝所も提供しており、授業料も含めてすべてが無償で提供されていたことには驚きを隠せない。また尹氏は、養正院の一角にある尹氏の私宅の大きな部屋一つを医務室にし、各種の薬や注射剤、簡単な医療器具を備えており、生徒のみならず、村の人々の病気まで無料で治療したりしていたのである。このような無償教育・無料医療が可能だった理由は、尹氏が自身の私財をつぎこんだだけではなく、鉄鉦山や高嶺土鉦山産業で得た利益を教育資金として充てており、一方では養正院の生徒たちに養蚕と瓦づくりをさせたり、養正院設立当時、丁海龍が無償で貸与した畑600坪も生徒たちが耕作したりして収入を得てまかなっていたからである<sup>25)</sup>。

養正院は私設講習所として認可は受けたものの、尹氏が創氏改名を拒否し続けていたことと、また以前勤めていた泉浦簡易学校の時から朝鮮語や民族教育を教えているという噂があって、官から厳しい監視を受け続けていた。養正院は交通も悪い僻地にあったにもかかわらず、郡から視学官や担当職員、巡查等がよく立ち寄って監視をしていたという。高台に位置していた養正院は村の入口まで見下ろすことができたので、官から監査員の車等が見えたら、鐘を鳴らして密かに教えていた朝鮮語の授業を中止し、教材は集めて天井の裏に隠しており、また進学準備クラスや上級クラス設置は規定違反だったので、その生徒たちは急いで裏山に逃げ隠れていたという<sup>26)</sup>。

以上のように、養正院は不就学者のための教育を支

援しつつ、民族教育も行うために設立された私設講習所といえるが、それは、設立・運営者の尹允基が教育事業の傍ら、独立運動家の呂運亨等と緊密な関係を結んでいたことから、独立運動にも関与していたことが窺えるからである<sup>27)</sup>。なお、養正院は、1947年2月第7期卒業生を輩出して閉院され、養正院の生徒たちは、その後新設される会泉西国民学校へ編入された<sup>28)</sup>。

## ② 明月塾の設立と運営

1942年、済州島の翰林邑明月里に設立された明月塾は、同里の呉鏞範によって誕生したものである。呉氏は1917年に生まれて旧右公立普通学校を卒業後、日本へ渡って働いたが、20歳に帰国し、地域の子どものための教育事業を始める。1934年、明月里にあった旧右公立普通学校が翰林里に移設され、翰林公立普通学校へ変更されることによって、明月里の子どもの就学率が急激に下がり、また当時は初等学校にも入学試験があったので、就学は簡単ではなかった。それ故、明月里には不就学児童が多く存在し、呉氏は里署長の呉景厚からの行政的支援を得て明月里の郷祠<sup>29)</sup>に明月塾を設立するようになる<sup>30)</sup>。

今回のインタビューの呉ゲアによれば、生徒は設立者の呉氏が各戸を訪ねて募集し、初年度は約30名で上・下級クラスに分かれ、上級クラスでは国民学校2年、下級クラスでは1年の教科書で教えていたという。最初は反感を持つ親もいたが、徐々に評判が広がり、2年目は生徒数が約3倍にまで増え、1、2、3学年制を整えるようになり、新入生を教えるための先生も増えたといわれている<sup>31)</sup>。

教育内容は、日本語と算数、自然、音楽、演劇、絵画、制式訓練などであり、教科書は使用済の小学校の教科書をもってきて、先生が黒板に書くのを写しながら覚えていた。授業での使用言語は基本的に日本語であり、朝鮮語で話すと、罰金1銭を課せられるか、掃除をさせられたが、呉氏はその罰金を集めて文具を購入し、皆に配っており、授業料ももらっていなかった(呉・ジョンスク、呉ゲア、呉相春)。このように自身の家庭より地域の教育事業に専念し、経済的にも厳しい状況が続いたせいも、呉氏は、当時は珍しかった離婚を経験している。

明月塾は1948年済州4・3事件<sup>32)</sup>の時に閉鎖されるまで、明月里の主要な教育・文化施設として機能していたと思われる。村の多くの不就学者を収容して教育し、農閑期には演劇を行い、隣村からも観に来る程、村の一大行事になっていたのである。また、設立者の

呉氏は明月里の美しい風景と住民の和合を図るために下記のような「明月の歌」を作詞し、それに金チャンハ氏が作曲を加え、明月塾で子どもたちに教えたのはもちろん、村の歌として定着していた<sup>33)</sup>。

1. 我が明月良いところ 緑樹青山深いところ  
野原には母牛が子牛を呼ぶ歌
  2. 東側によっきりそびえ立つ岳は漢拏山  
西側を眺めると 海の上に飛鳥島
  3. 北に高い白頭精氣 南へ伸び下りたところ  
ムクゲの華やかな我が明月台
  4. 山に登った雁は良いところを知らず  
エノキの緑の中に我が明月台
- (サビ) 来いと呼ぶのは 緑樹 清水  
集まれ友よ 我が明月台へ

## C. 養正院及び明月塾出身者のオーラル・ヒストリーにみる不就学者の学び

今回インタビュー対象となったのは、養正院出身者4名(男女2名ずつ)、明月塾出身者6名(男女3名ずつ)で総計10名である。彼らの証言から両講習所の特質をまとめると次の通りである。第一に、両講習所とも地域有志によって設立され、不就学者に対して無償で教育を提供していた。当時不就学の主な要因としては経済的貧困のほかに、村に学校がない、または女性だからという理由が挙げられるが、両講習所には学校への入・進学受験で失敗し、その受験準備のために通う人もいた。明月塾の呉鏞守は「(翰林国民学校のレベルが)一段階高く、日本語の口述試験があったんです。私も一回落ちたことがあります」と言っており、明月塾で勉強してから国民学校に入学するので、「翰林国民学校では明月里の子どもたちがいろいろな面で優秀でした」と梁栄一も口を揃える。一方、養正院には中学校進学に失敗した子どもたちを集めて指導する中学進学クラスもあったが、そのクラスに通っていた尹金同は、「中学受験に失敗し、2年間養正院の中学進学準備クラスに通っていました。同進学クラスには約20名の生徒がおり、そのうち、10余名は遠方から来た子どもたちで教務室の隣にあった部屋で寄宿生活をしていました」と述べている。すなわち、両講習所は不就学者の学びの場としての機能の他に、正規学校への入・進学を手助けする予備校的な機能も果たしていたのである。

第二に、両講習所とも授業で日本語を使いながら、「皇国臣民化」の方針に反しないように教育していた

が、実際は官庁の監視の目をすり抜け、隠れて民族教育を行っていた。呉ゲアによれば、明月塾である日コ・ダルヒュという生徒が先生に対して、教科書に歴史があるのに、なぜ教えないのかと尋ねたところ、呉鏞範先生は次のように答えたという。「それはとてもいい質問だ。実は機会があれば、一度言おうと思っていた。この本の歴史は日本の奴らの歴史だから、最初から時間割に入れてもいない。私たちにも昔朝鮮という国があり、王様もいた。頭の中のこの文字（ハングル—引用者）を、この国を倭奴に奪われ、私たちは倭奴の奴隷になった」と言いながら、朝鮮の歴史を話してくれたという。そして「この話が漏れると、その日が私の命日になるから、絶対言わないでほしい。君たちの心の中にしまっておいて、今も独立軍がどこかで戦っているから、解放されたら、その時は我が国（朝鮮—引用者）のために忠誠しなさいとおっしゃっていた」と、当時の呉鏞範先生の苦しい胸中が垣間見られるエピソードを語っている。一方、養正院でも規定上朝鮮語を教えるにはいけなかったが、日本語の授業に出てくる漢字のふりがなをハングルで表記して教えたり、朝鮮語を教えている最中に官庁から監視役が来たら、鐘を鳴らして急いで黒板に書いたハングルを消し、朝鮮語教材を集めて天井の裏に隠したりして、摘発の危機を逃れていたと証言する（金純任、任泰善）。

第三に、民族教育を潜在的な目的として持っていた設立・運営者の思いに対し、子どもたちが必ずしもその影響を強く受けたとは言い難い面がある。養正院に通っていた尹金同と任泰善は、先生が授業で民族教育に触れることは一切なかったと述べており、金純任は朝鮮総督府の皇民化政策の一環として各家庭に設置するように督励していた神棚に向かって毎朝熱心に礼拝をしたという。その理由については礼拝することはいいことだと聞いたからだと話す。つまり、生徒たちが講習所に通う目的は、民族教育や識字教育などの講習所の設立趣旨とは必ずしも関係なく、「講習所に行けば、家で仕事しなくていいから」（呉・ジョンスク、呉相春）、「友達を通うから」（金純任）、「ただ学ぶのが好きだから」（呉ゲア、金純任、オ・ヨンスク）、「楽しい・おもしろいから」（呉・ジョンスク）、「中学進学のため」（尹金同）など、各自の興味・関心や必要から講習所に通っていたのである。

第四に、両講習所はそこに通う子どものみならず、当該村民の心の拠り所でもあったといえる。明月塾では毎年演劇公演を開くなどして村民の娯楽を担い（全員）、また村の歌を作って地元への愛着を育てていた

（呉鏞守）。養正院では施設の一角に医薬室を設け、医療支援を受けられる地域の「病院」としての役割も果たしていたのである（金純任、オ・ヨンスク）。

#### 4. おわりに

本研究では、親戚等の非常に狭いネットワークで小規模で行われる講習会までを含む夜学とは違って、比較的組織的で規模も大きくて授業が昼間に行われていた私設講習所—養正院と明月塾—に注目し、両講習所出身者へのインタビュー調査を通して当時の私設講習所の実状やその特質を明らかにした。

私設講習所は、学校へのアクセスの不便さや経済的理由から学校に行けない不就学児童の多い村に、当該地域の有志等が設立する場合が多く、運営体制は初等学校にほぼ近い形を取っていた。しかし、講習所は不就学児童の教育を担う役割のみならず、正規学校への入学競争の激化によって生まれる受験失敗者たちの受け皿としての機能も果たしていた。すなわち、入・進学試験に再挑戦するための準備過程として講習所を利用する子どもたちが多くいたのである。また、講習所の設立・運営者が厳しい官からの統制を巧妙に避けながら、進めようとした民族教育等がそのまま子どもたちに浸透したとも言い難く、むしろ子どもたちは各自の必要から講習所に通っていたといえる。つまり、子どもたちは教育において常に主体として存在しており、必ずしも教育提供者の意図通りには動かなかった面もある。このような側面は従来の研究では明らかにできなかった点として、今回オーラル・ヒストリーという手法を用いたから明らかにすることができたといえる。

本研究は、2ヶ所の私設講習所から10名の出身者に対してインタビュー調査を行ったもので、これだけでは植民地期朝鮮における私設学術講習所の全貌を明らかにすることはできない。ただ、講習所出身者の大半が非常に高齢であり、関連資料も少ないため、今後新たな出身者を発掘することは決して用意ではない。その中で、植民地期朝鮮における講習所出身者へのインタビュー調査を試みて、当時の実状を少しでも描き出せたのは、本研究の大きな成果といえよう。

#### 注

- 1) 李明實「日本強占期社会教育史の基礎的研究—朝鮮総督府による施策の展開を中心に—」筑波大学大学院博士学位論文、1999、p.55。

- 2) 李正連『韓国社会教育の起源と展開—大韓帝国末期から植民地時代までを中心に—』大学教育出版, 2008, p.173.
- 3) 「新興講習所設置」『毎日申報』1928.3.7.
- 4) 韓祐熙著・佐野通夫訳「日帝植民統治下の朝鮮人の教育熱に関する研究」四国学院大学『論集』第81号, 1992, pp.113-132; 呉成哲『植民地初等教育の形成』教育科学社, 2000などがその代表的な研究である。
- 5) 李正連「植民地朝鮮における実業補習教育に関する一考察—実業補習学校の設置及び運営を中心に—」名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属生涯学習・キャリア教育研究センター『生涯学習・キャリア教育研究』第7号, 2011, pp.14-15.
- 6) 姜在彦『朝鮮近代史』平凡社, 1998, p.260.
- 7) 板垣竜太「植民地期朝鮮における識字調査」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『アジア・アフリカ言語文化研究』58, 1999, p.283.
- 8) 同上, p.287.
- 9) 同上, pp.287-288.
- 10) 李正連「植民地期朝鮮における不就学児童と夜学—1930~40年代夜学経験者のオーラルヒストリーをもとに—」『日本統治下台湾・朝鮮の学校教育と周辺文化の研究』(平成23年度~平成25年度科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果報告書(研究代表者:佐藤由美)), 2014.3, pp.68-69.
- 11) 李正連, 前掲書, 2008, p.70.
- 12) 1913年1月「私設学術講習会ニ関スル件」制定(朝鮮総督府令第3号)  
 第一条 私人ニシテ学術研究ノ為講習会ヲ開催セムトスルキハ左記(下記—引用者)各号ノ事項ヲ具シ道長官ノ認可ヲ受クヘシ  
 一 講習ノ目的  
 二 講習ノ期間及場所  
 三 講習ノ事項  
 四 講習員ノ資格及定数  
 五 講師ノ住所、氏名及経歴  
 六 経費支弁ノ方法  
 第二条 道長官ハ特ニ講師ノ選定又ハ派遣ニ付便宜を与フヘシ  
 第三条 道長官ハ講習会ニシテ其ノ方法不適当又ハ有害ナリト認メタルトキハ之力変更ヲ命シ又ハ第一条ノ認可ヲ取消スコトヲ得  
 第四条 第一条ノ認可ヲ受ケシテ講習会ヲ開催シタル者アルトキハ道長官ハ其ノ閉鎖ヲ命スルコトヲ得
- 13) 石川武敏「1920年代朝鮮における民族教育の一断面—夜学運動について—」北大史学会『北大史学』Vol.21, 1981, p.37.
- 14) 李正連, 前掲書, 2008, pp.177-179.
- 15) 李明實, 前掲論文, pp.141-147.
- 16) 朝鮮総督府学務局学務課「簡易初等教育機関設置に関する件」『朝鮮学事例規』1938, p.356.
- 17) 同上, pp.357-358; 朝鮮総督府『施政二十五年史』1935, pp.897-899.
- 18) 申大光「1930年代農村振興運動과 簡易学校의 設立・運營」中央大学校教育大学院修士学位論文, 2010, pp.25-27.
- 19) ハン・ギュムは、養正院の設立・運営、後援に関わった主要人物である尹允基と丁海龍の中、誰が設立者なのかについてはまだ論争中であるが、これまでの資料から尹允基が設立及び運営で、丁海龍は後援者だったとみている。한규무「일제강점기 학산 윤운기의 항일민족교육」학술심포지움자료집『전남사범의 설립과 학산의 민족교육운동』광주교육대학교 역사문화교육연구소, 2013, pp.17-18.
- 20) 선경식『민족의 참교육자 학산 윤운기』한길사, 2007, p.134.
- 21) 同上, p.337.
- 22) 同上, pp.64-69.
- 23) 同上, pp.71-114; 한규무, 前掲論文, pp.9-13.
- 24) 선경식, 前掲書, pp.146-147.
- 25) 同上, pp.155-185.
- 26) 同上, pp.155-159.
- 27) 同上, pp.203-217.
- 28) 同上, pp.199-200.
- 29) 著名な学者や忠臣等の功績や徳行をまつるために建てた祠堂。
- 30) 翰林呂明月里『明月郷土誌』2003, p.283, 614.
- 31) 오계아『명월리 팽나무처림』, 도서출판 세림, 2006, pp.161-162.
- 32) 1948年4月3日に済州島で起こった島民の蜂起にともない、南朝鮮国防警備隊、韓国軍、韓国警察、朝鮮半島本土の右翼青年団などが1954年9月21日までの期間に引き起こした一連の島民虐殺事件。
- 33) 翰林呂明月里, 前掲書。

## 付記

本研究は、科学研究費補助金(基盤研究(C))「植民地期朝鮮における不就学者の学びと教育支援活動に関する研究—「夜学」を中心に—」(研究代表者:李正連, 課題番号:26381066)による研究成果の一部である。なお、本研究に際し、インタビューに応じてくださった方々に心よりお礼を申し上げます。